

トマト葉かび病の防除

[分類] 普及 [所属名] 農業試験場 環境部

[研究期間]

令和4～6年度

[背景とねらい]

ミニトマト産地の日高地域では、薬剤耐性を持つ葉かび病菌 (*Passalora Fulva*) の発生が問題となっています。そこで、伝染源となる胞子の飛散時期や資材への付着状況を調査するとともに、各種薬剤の防除効果を評価し、効果的な防除体系の検討を行いました。

[研究の成果]

- 1. 現地ほ場において、令和4年では10月中旬から、令和5年では8月下旬から胞子の飛散が確認されました（データ省略）。
- 2. ペンコゼブフロアブル、ダコニール1000、ベルコート水和剤は葉かび病に対して高い防除効果を示しました（図1）。
- 3. 上記の有効薬剤3剤を用いて栽培初期からローテーション散布することにより、葉かび病の発病が抑制されました（図2）。
- 4. 栽培現地の葉かび病多発生ほ場において、栽培終了時に資材への胞子の付着が確認されました。胞子が付着した資材の使用は伝染源となることが確認されました（図3）。
- 5. 栽培開始時に、胞子が付着した資材に対してイチバン乳剤もしくはトリフミンジェットを用いた薬剤処理をすることで葉かび病の発病が抑制されました（図4）。

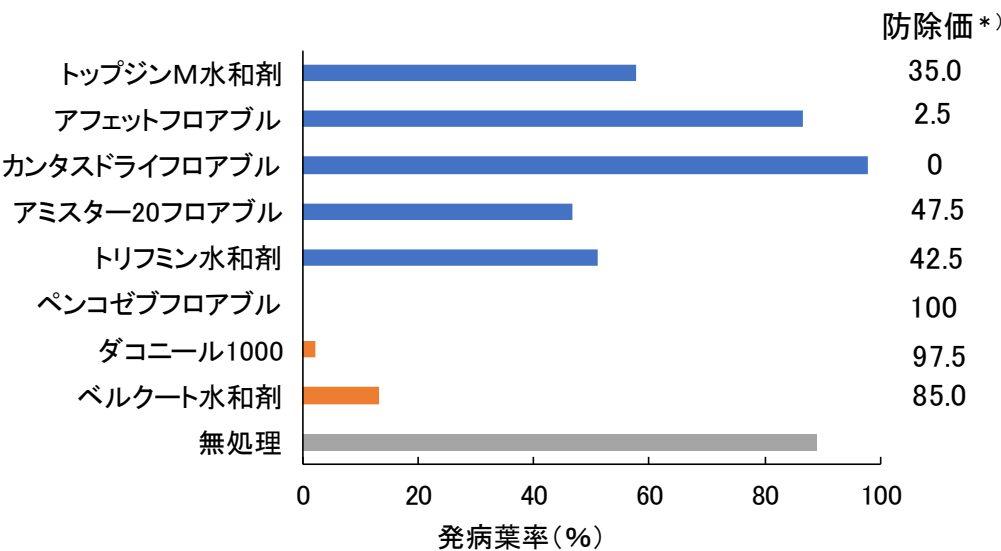


図1 トマト葉かび病に対する薬剤の防除効果

注1) 薬剤散布の翌日に、印南町で採取したトップジンM、アフエットフロアブル、カンタスドライフロアブル、アミスター20フロアブル、トリフミン水和剤耐性の葉かび病菌を接種し、20日後に発病を調査

*) 農薬の効果の指標。防除価が80以上の薬剤を効果が高いと判断

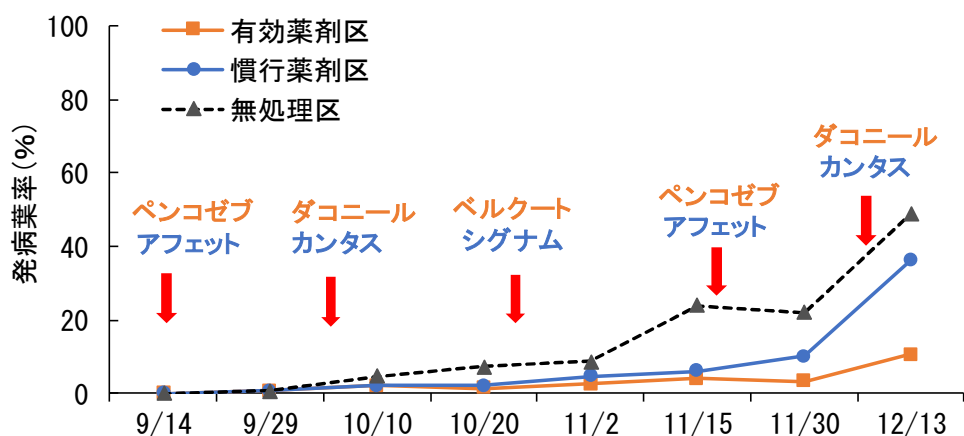


図2 薬剤のローテーション散布が葉かび病の発病に及ぼす影響

注1) 農業試験場内ミニトマト栽培施設内(令和5年8月28日定植)で実施、1区10株3反復
有効薬剤区ではペンコゼブフロアブル、ダコニール1000、ベルコート水和剤を散布
慣行薬剤区ではアフェットフロアブル、カンタスドライフロアブル、シグナムWDGを散布
薬剤散布日: 令和5年9月14日、10月4日、10月24日、11月16日、12月8日



図3 胞子が付着した誘引紐の使用が
葉かび病の発病に及ぼす影響

注1) 農業試験場内ミニトマト栽培施設内(令和5年9月20日定植)で実施、1区1ハウス24株
各ハウスに誘引紐を48本(6本/m²)ずつ設置
胞子付着誘引紐設置区の誘引紐には葉かび病菌胞子を噴霧

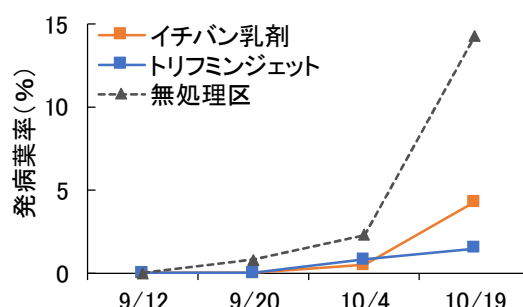


図4 胞子が付着した誘引紐への薬剤処理が
葉かび病の発病に及ぼす影響

注1) 農業試験場内ミニトマト栽培施設内(令和5年9月12日定植)で実施、1区1ハウス60株
葉かび病菌胞子を噴霧した誘引紐を各ハウスに30本(約2本/m²)ずつ設置
イチバン乳剤区: 薬剤を散布した誘引紐を設置後に定植
トリフミンジェット区: 定植、誘引紐設置後にくん煙処理

[成果のポイントと活用]

1. 胞子の飛散が早い場合、定植直後の8月下旬から開始するので、栽培初期からの防除が重要です。また、葉かび病多発生ほ場では資材へ胞子が付着している場合があるため、資材の交換や消毒を行うことにより次作の伝染源とならないようにしてください。
2. ケンジャフロアブルおよびホライズンドライフロアブルも高い防除効果が認められており(データ未掲載)、ローテーション散布に組み込むことができます。ただし、ケンジャフロアブルは薬剤耐性菌が発生しやすいため、連用は避けてください。
3. トリフミンジェットを使用した場合はトリフルミゾールを含む薬剤の使用回数に注意してください。

[その他]

予算区分: 県単(農林水産業競争力アップ技術開発事業) 問い合わせ先 TEL: 0736-64-2300